

研究テーマ

ひとりひとりの深い学びを目指した授業の工夫

—「書く」活動を中心として—

1 テーマ設定の理由

学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」は、生徒ひとりひとりが考えを文章にまとめることができる、他者に分かりやすく伝えることができる、という土台があってこそ実現できると考える。この土台として必要な言語力は、協働学習の充実や日常生活でも他者との円滑なコミュニケーションと深く繋がってくる。そのため、授業で自分の考えを書く、他者に説明するなどの言語活動を取り入れているが、生徒からは「なんか○○。」や「～というような感じ。」など抽象的な発言が多い。また文章を書く活動では、「頭にはあるがなんて書いたらよいか分からない。」、「うまく言葉にできない。」というような声がかかることが多く、言語力の乏しさが課題に感じる。本校では、この言語力が乏しいことで、他者とコミュニケーションがうまくとれず、生徒同士のトラブルに繋がっているように感じるケースもある。そこでまずは自分の考えを言葉にする、言葉でまとめるという、「書く」活動を中心に授業を進めていきたいと考えた。

また、昨年度のテーマは「ひとりひとりの深い学びを実現するための授業の工夫」であった。テーマに即し深い学びを実現するため、教員からの発問で授業を進めるのではなく、生徒の初読の感想や疑問を基に授業を進める授業づくりに努めてきた。そのため授業のノートとは別に、本時の授業を振り返るための振り返りノートを書かせ、そこに書かれた内容から学習課題の設定をしていた。生徒自身が本時についてまとめることによる思考の深まりや、毎時間の理解度を把握できるという成果があると考えている。この振り返りノートは、今年度のテーマであるひとりひとりの深い学びを目指した授業の工夫をするということと、「書く」活動を中心に行うところに関連があるため、今年度も続けて活用していきたい。

授業づくりをする中では、どの単元でも書く活動をいれられるわけではない。書く活動にふさわしい単元を精選する難しさや書くテーマの設定に課題を感じる場面も出てくることが考えられる。そのような単元で書く活動をどう入れるか、どういう視点でその活動を設定したのかを熟考することで自分の成長に繋げたい。他にも振り返りノートで学習を振り返るだけでなく、本時のねらいが達成できたかの評価を書かせることで、指導と評価の一体化も図りたい。

2 実践内容

【実践1：単元名「形」（3年生）】

本単元は、圧倒的な強さで敵に脅威を与えていた中村新兵衛が、自分の戦闘装束である猩々緋の羽織と唐冠纓金のかぶとを若い侍に貸すところから物語が始まる。自分の実力に自信がある中村は戦闘装束いわゆる「形」を貸してしまうが、敵の認識が「中村新兵衛＝強い」から「猩々緋の羽織・唐冠纓金＝強い」というイメージに変化し、「形」自体が力を持ち始めていることに気づかない。「形」を身につけていなかった中村は、敵に脅威を与えることができず脾臓を貫かれてしまう話である。

主題は「形」のもつ見えない力と、主人公が気づかないうちに「形」に威を借りていた、ということである。この物語は原典があるが、その原典の教訓は威勢を示して相手の気力を奪い、勢いを乱すことで戦いは勝てる、ということである。

この単元で、自分の立場を明らかにして考えを書く活動を行った。この書く活動は、部活動での生徒の反応からヒントを得た。ある生徒が、部活動の大会中に対戦をしたことがなくプレーを見てもない学校の生徒に対して、「あのユニフォームは強そうに感じるから、あの学校は強いと思う。」という発言をしていた。この発言は、本単元の敵が中村の強さから感じる恐怖を、中村が着ている物を見るだけで強さや恐怖を感じるようになった、というところと結びつけることができると考えた。

そこで、この物語と原典の物語の主題にも繋がり、生徒の経験とも繋がるような書くテーマとして、「戦いに大切なものは中身（＝実力）か形か」を挙げた。文章を書く前に自分がどの立場なのかを可視化するため、名前プレートを貼らせた（図1）。考えることや文章を書くことが苦手な生徒への支援として、名前を貼らせた後に数名の生徒から、なぜそこに貼ったのか意見を聞いた。その後、自分の考えを作文用紙にまとめ、班内で発表し、再度名前プレートを貼らせた。書いた文を相手に読むという活動を入れることで、相手が聞いて分かりやすい文章を書く必要性や、納得してもらいたいということを意識して書いている生徒がみられた。班での発表後には、相手の意見を聞き、自分の意見を変える生徒もおり、「なるほど。」や「俺の説明分かるやろ。」などの生徒の声から、考えの広がりや相手に分かりやすい文章を書けた満足感を得ている様子を感じ取れた。また、作文を集め添削することで、原稿用紙の使い方の指導、書き方の指導ができるのが教師側としてもよかった（図2）。単元のまとめの感想を振り返りノートに書いたが、題名がなぜ「形」なのか、に着目している生徒も多く、内容の理解が深まっているように感じた。興味を持たせることや集中して考えさせることを今後も意識して授業づくりを行いたい。

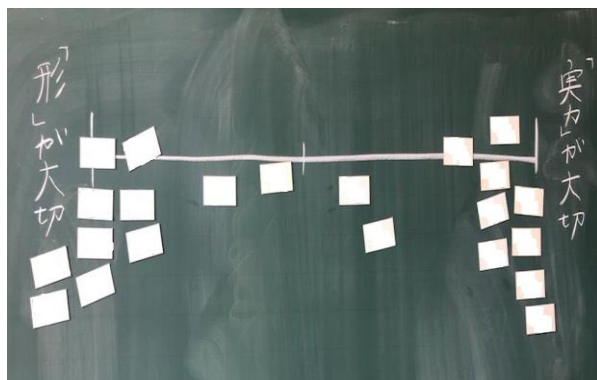


図1：立場を明らかにした名前プレート

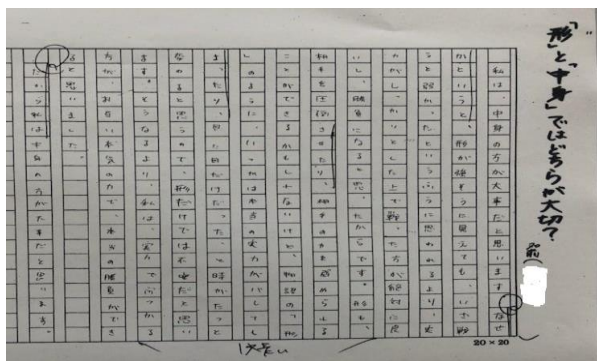


図2：添削後の作文用紙

今回は班での発表にしたが、クラス全体での発表や、立場を分けてそれぞれの立場の意見を説明し合うようなディベート形式にも挑戦していきたい。クラス全体での発表の場合には、同じ意見の人の発表に対して付けたしの説明をするなど、聞いているだけの生徒が出ないように工夫をしていきたい。

【実践2：単元名「万葉・古今・新古今」（3年生）】

本単元では、「和歌の詠まれた背景と意味や詠み込まれた心情を想像し、和歌の世界に親しむ」ということを目標に、万葉・古今・新古今の和歌である十八首を学んだ。単元のまとめとして、自分の好きな和歌をみんなに紹介をする活動を行った。紹介の書式としては、インスタグラムを基にした。インスタグラムは写真を載せ、その写真の説明や本人の感情などを言葉にし、ハッシュタグ（#）につけるSNSの一つである。

そのインスタグラム内で、「インスタ俳句」が流行っているとテレビで取り上げられていた。写真に合わせ、ハッシュタグに五・七・五の言葉をつける、というものであった。本校の生徒もインスタグラムを見たり、アカウントをもっていたりする現状を踏まえ、身近なインスタグラムを参考にした。活動の説明としてインスタ俳句を生徒に見せたところ、「自分ならこう書くけどな。」、「やってみたい。」という意欲的な声が挙がっていた。

和歌を紹介する方法として、好きな和歌を一首選び（図3の①）、その和歌の意味に合う写真を張り付け（図3の②）、その和歌が好きな理由を五・七・五・七・七の形でまとめさせた（図3の③）。好きな和歌は教科書と国語便覧の和歌を含めた五十五首から選ばせ、その和歌の意味に合う写真はインターネットから検索した。

写真を選ぶ際に生徒たちが、「和歌の意味が伝わるだけでなく自分の選んだ理由も伝わる写真を選びたい。」と検索していた。その際に「この写真、分かりやすい?」、「なんでこの写真やと思う?」など周りの生徒同士で確認しながら選んでおり、自分の好きな和歌の良さを他者に伝えたいという姿がみられた。また、理由を五・七・五・七・七で書く際には「五文字と七文字で書くのは難しい。」、「書きたいことが短くならない。」という声が多くあがり、「字余りでもいいですか。」など工夫しようとする生徒もいた。

今回の活動で書きたいことを短くするためにどう言い換えるのか、伝えたいことを表現するにはどのような言葉を使うのがふさわしいのかという語彙の選択に難しさを感じた生徒が多かった。これを克服するためには、自分の中の語彙をどこまで増やせるのかが重要である。語彙を増やすことは、思いを発信できる幅を広げることにもなる。各単元に出てくる新出語句を覚えたいというきっかけになったように感じた。



図3：生徒の作品

【実践3：単元名「幸福について」（3年生）】

本単元は「幸福とはなにか」について議論する3人の会話文を読み、議論の仕方を学ぶものである。議論には自分の意見を主張したり反論したりするだけではなく、共感や考えの根拠を話すこと、相手の意見を認めることも重要である。授業中に、発問に対して活発に答える3年生だが、教員側が正答を言う前に、他の生徒から「それは間違えてるやろ。」など否定的な発言ができることがある。発言した答えが間違っていたとしても、発言した生徒がその答えにたどり着いた過程や否定的な発言をした他の生徒が、間違えていると考えた根拠が重要である。相手の意見を一度受け入れ、自分の中で再度熟考する経験をさせるため、単元のまとめとして「班で議論をする」活動を行い、活動の目標を「他者の意見を聞き、反論・共感しながら自分の考えを深めていく」とした。

議論テーマとして、「親・お金・恋人・友達の中で、優先順位をつけるなら」とした。議論するための「話す・聞く力」だけでなく、自分の考えを言語化するための「書く力」もつけるため、議論する前に自分の意見とその理由について振り返りノートにまとめさせた（図4）。

議論中の生徒の発言として、「でも」、「だって」という反論する声も出ていたが、「なるほど。」や「その部分だけは共感できる。」など相手の考えを受け入れる言葉も出ていた。

議論後に周りの意見を聞いて自分の意見や順位はどうなったかのまとめなおしをさせた（図4、図5）。生徒の振り返りノートからは、「〇〇さんの～という意見を聞いて納得した。」や「考えがこれしかないと思っていただけ話し合いをしたら、なるほどや納得できる意見がたくさんできて面白

い。」「多様な意見がある。」などが書かれていた。

このような意見ができるのは、他者の意見を踏まえ自分の中で再度考えるという深い学びができたからではないかと考える。普段の授業の中でも他者の意見を聞く時間や聞いて熟考する時間をつくっていききたい。

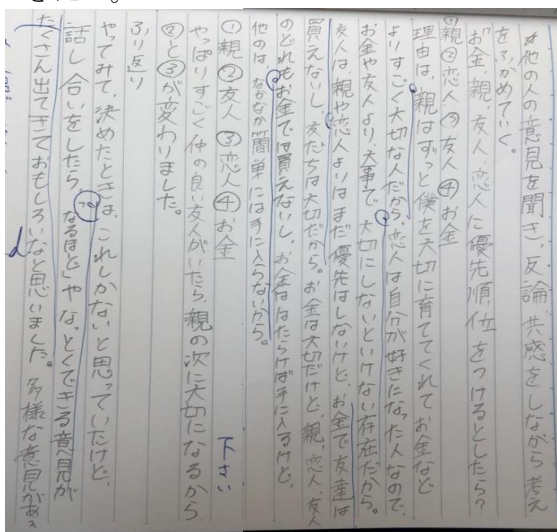


図4：自分の考え+まとめなおしをしたノート

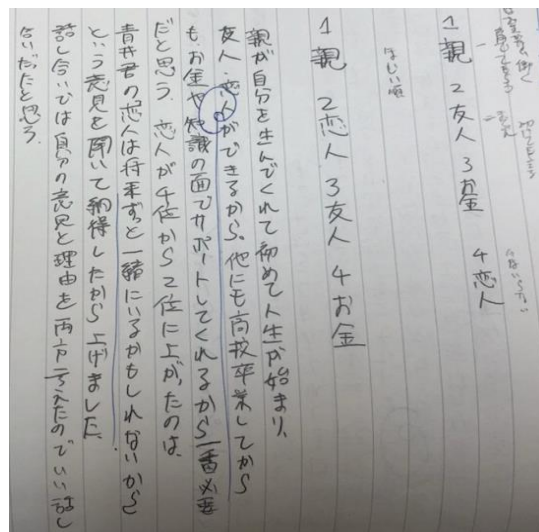


図5：まとめなおしをしたノート

【実践4：単元名「さんちき」（1年生）】

本単元では、「①生徒が分からない語句や慣用句も多く出てきているため、語句の意味を知ること」と、「②本文を根拠に登場人物である「三吉」と「親方」の人物像を捉えること」を目標にした。

①の目標達成のため、語句の意味を調べるのではなく漢字や文脈からどういう意味だと思うか考えることに重きをおいた。生徒からは、「なんとなくは分かるけど、なんて説明したらいいか。」「まとめる語彙力がないです。」などの声が多くあがり、自分の言葉でまとめて書く難しさを感じているようだった。個人で考えるのが難しいようであったため、班で考えさせた後に、班ごとに語句の意味を黒板に書かせ答え合わせをすると、「そう書けばいいのか。」「書き方がうまい。」など他の生徒の書き方を学んでいる声があがった（図6）。答え合わせで文を直す際には、できるだけ生徒の書いた文を活用し正しい文に書きなおしをし、生徒の文を尊重している。間違えたという事実ではなく、生徒の書いた文の順番を入れ変えたり付け加えたりすることで違うまとめ方もできる、ということを教えた。

②の目標達成のため本文から人物の性格がわかる記述を個人で探し、人物像をノートにまとめた。その後には班で意見を集約し、発表をするようにした。まずは自分で人物像をノートにまとめることで、班活動をした時に自分の考えを話す材料になる。書くことが苦手な生徒への配慮として、年度初めにクラスで書いた自

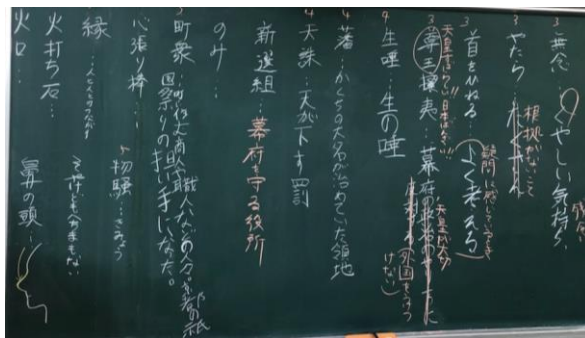


図6：語句の答え合わせ中の黒板



図7：班で人物像をまとめたミニ黒板

己紹介カード（年齢や性格などを書いたもの）を参考に、人物像として必要な情報はなにかを示したのちに、それが分かる文章に着目するよう促した。本文を読むことに抵抗感を感じていた生徒も、読むヒントを得たことで、クイズ感覚で読み進めることができていた。発表の際には、意見を班ごとにミニ黒板にとめさせ貼ることで可視化した（図7）。発表を聞く聴覚情報だけでなく、視覚でも同じ意見や違う意見が分かることで、配慮の必要な生徒も話を聞きやすくなっていたように感じる。またミニ黒板でみんなに見せるということから班でまとめていく中で、他の人に分かりやすい言葉を選んで書いたり、箇条書きで書いたり自分たちで工夫する姿がみられた。

【実践5：単元名「竹取物語」（1年生）】

本単元では、古典作品に描かれた人間の心のありようについて考える、ということを目指した。作品に登場する人間は、大切な人と離れる切なさや相手を大切に思う優しさだけではなく、かぐや姫たちにうそをつき騙そうとする愚かさもある。一方、天人は人間のような情がないため、冷静な態度をとる。この反する人種を取りあげ、「人間がよいか、天人がよいか」ということを考えた。まず人間と天人の違いについて生徒の意見をまとめたところ、人間は優しさや愚かさがある、いずれ死ぬ、空を飛べない、悩みや辛いこともある、などが挙げられた。天人は情がない、死なない、空が飛べる、などが挙げられた。この違いを基に、振り返りノートに意見をまとめさせた。その後、まとめたことを周囲の人と話し合い、他者の納得できる意見を振り返りノートに追加していった（図8）。

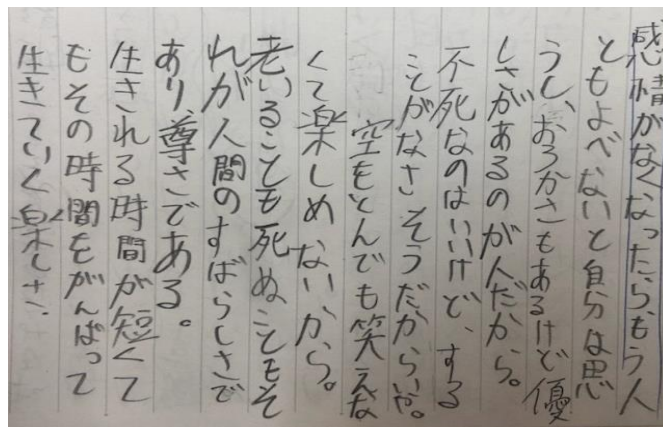


図8：自分の意見+他者の意見の振り返りノート

自分の意見だけでなく、他者の意見を聞き、相手の考えを受け入れたり再度考えなおしをしたりすることが、深い学びに繋がると考える。「相手の～という意見が自分では考えられなかったので、すごいなと思った。」などの振り返りや、他者の意見をノートにつけたしていく姿がみられ、考えの幅を広げられているのではないかと感じた。

今回のこのテーマは、「人間とは何か」を考えていくことでもあったが、部活動や勉強、友人関係で悩む生徒たちが、人間でよかった、頑張って生きたい、など前向きな言葉を書いていることが印象的であった。

3 まとめ

今回の実践では、書くことに抵抗を感じている生徒に対していかに書かせるか、ということ意識してきた。書くことに抵抗を感じる生徒は、書く活動を面倒くさいものとして捉えている。そのなかでどういう形で書かせるか、何をねらいに書かせるか、ということ工夫することに難しさを感じた。そこで書いたものを生徒同士で繋げ、自分の書いた文章が認められたり、意見として認知されたりする経験を積ませる活動を入れた。また作文などの分量が多い書く活動ではなく、自分の考えや言葉の意味をまとめるなどの分量の少ない書く活動を増やしたりした。そのしたことで少しずつ書くことに対して前向きに捉える生徒も出てきたように感じる。他にどのような書く活動が考えられるのか、単元にふさわしい書く活動とは何かを今後も試行錯誤をして、授業を進めていきたい。